

【患者アウトカム尺度であるEQ-5Dを用いたQOL値データの収集と分析】

A. 研究目的

わが国の平均寿命は男女とも6～7年連続で過去最高を更新し続け、2018年現在、男性81歳、女性87歳と世界的な長寿国である。日本が世界的な長寿国を達成している理由として、医療機関へのアクセスの良さや患者による医療費の負担が少ないことなどが報告されている。その一方で、自立して生活できる年齢を示す「健康寿命」は2016年時点で男性は72歳、女性は74歳と、平均寿命と大きな開きがあり、余命の最後10年間は必ずしも全ての人が生活の質(QOL値)を高く維持しているとは限らない。医療機関では、患者の疾患に応じて医学的に最適な治療が提供されるが、医療は時に、手術の合併症や後遺症などによって予想と反して患者のQOL改善に結びつかない事態も起こりうる。患者が治療を決断する時は、治療による身体機能およびQOL改善の見込みについて、医療者が十分に説明する必要があるが、特にQOL改善の見込みについては患者の理解を得ることは容易ではない。

Euro-QOL (EQ-5D)は、1987年にオランダの研究者グループによって開発された患者のQOLを測定する最も有名な尺度であり、5つの健康状態に関する項目(「移動の程度」「身の回りの管理」「ふだんの活動」「痛み/不快感」「不安/ふさぎ込み」と1つの主観的な満足度に関する項目「視覚評価法(Visual Analog Scale;VAS)」で構成されている。EQ-5Dによって患者の効用値を算出することができ、その値は0から1の範囲で、1が完全な健康状態、0が死亡を意味する。また、治療によってもたらされた患者の効用値への貢献度(治療の前後で得られた差分)をHealth Gain値と呼ぶ。英国では、患者アウトカム尺度(Patient Reported Outcome Measures: PROMs)として、National Health Service (NHS)傘下のすべての医療機関で、予定手術患者を対象に手術前、手術後、術後3～6か月時点において、EQ-5D測定を行い、公表が義務付けられている。わが国では、患者の効用値の測定が全国の医療機関で定期的に行われることはなく、患者の治療後の患者QOLの予測については、医療従事者による臨床経験に頼らざるを得ない状況である。

本研究では、聖路加国際病院にて入院を計画している患者を対象に、入院前、退院後の約1か月時点、

約6か月時点で日本語版EQ-5D-5Lを用いてQOLを測定し、効用値を算出することを目的とする。得られたデータは、対象患者を10歳きざみの年齢階級、診療科別に分けて分析する。なお、日本語版EQ-5D-5Lの利用に際しては、Euro-QOL (EQ-5D)本部と連絡を取り、レジストリーの手続きを完了したうえで行った。

研究により期待される成果としては、日本における予定入院患者による、年齢群別、および診療科別の入院前後の平均効用値が明らかになることである。

B. 研究方法

日本語版EQ-5D-5Lを用いた効用値を実際に医療機関において、入院前後で測定し比較し、課題を抽出する。

研究デザインは、横断研究。選択基準は、2020年1月～2021年3月までに聖路加国際病院において入院が計画された患者で、除外基準は、主治医が認知能力に問題があると判断した患者とした。年代別、および診療科別に入院前、退院後およそ1か月時点で日本語版EQ-5D-5Lを測定し、効用値の平均値を求めた。

本年度は測定できなかったが、次年度には退院後6か月時点のデータも収集し、効用値の推移を検討する予定である。

(倫理面への配慮)

本研究は匿名加工された調査票を用い、情報の収集、分析にあたっては匿名加工処理を行い分析した。

C. 研究結果

2020年1月より、聖路加国際病院において予定入院した患者を対象に、入院前、退院後の約1か月、約6か月での日本語版EQ-5D-5Lの取得を開始した。

その結果、2020年1月～3月の間に日本語版EQ-5D-5Lが発行された件数は799件であった。そのうち入院前と入院後約1か月時点でのデータが得られたのは145件であった。調査期間の関係から退院約6か月時点でのEQ-5D-5Lのデータを用いた比較はできなかった。

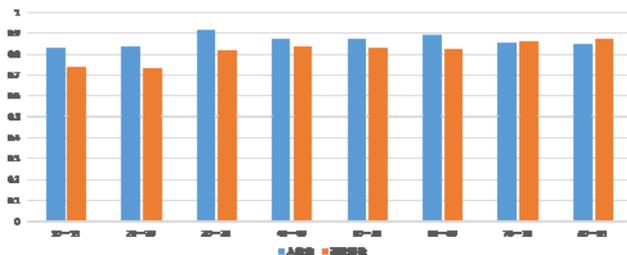
入院前後比較可能であった145件の内訳を表1に示す。

	男性	女性	全体
人数	57	88	145
10代	0	1	1
20代	9	3	12
30代	1	10	11
40代	2	20	22
50代	8	26	34
60代	13	8	21
70代	16	17	28
80代	8	8	16
平均年齢	60.5 ± 19.6	55.3 ± 15.9	57.4 ± 17.6
平均在院日数	4.9 ± 4.6	5.1 ± 2.9	5.0 ± 3.6
EQ5D5L効用値			
入院前	0.8675 ± 0.1459	0.8694 ± 0.1266	0.8687 ± 0.1345
退院後(1ヶ月以内)	0.8370 ± 0.1427	0.8265 ± 0.1399	0.8306 ± 0.1411

(表1.Patient characteristics)

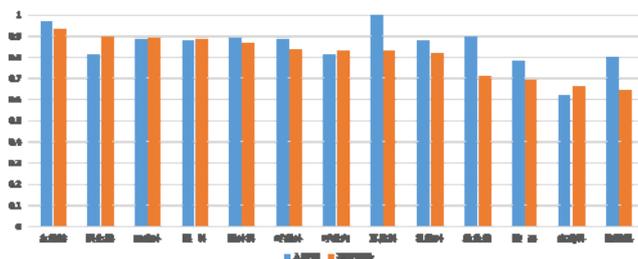
2020年1月～3月の間で入院前後の比較が可能であった件数は145件であった。平均在院日数は平均5.0日と短く、入院前後の効用値は退院後約1か月時点では入院前に比べて値が悪くなっていた。

年代別に比較しても概ね全年代で退院後約1か月時点での効用値は入院前と比較して低かった。



(図1.年代別入院前後効用値平均)

診療科別の比較では、皮膚科を除いたほぼすべての診療科で退院後約1か月時点での効用値は入院前に比べて低かった。



(図2.診療科別入院前後効用値平均)

D. 考察

EQ-5D-5Lを用いた効用値について、入院前と退院後約1か月時点と比較すると、退院後約1か月時点での効用値が低くなる傾向にあった。入院期間も短く、退院後約1か月時点での外来受診時には、効用値は入院前に比べて下がる傾向があり、この時点では、退院後の状態に復帰できていないことが伺える。

本年度は、調査期間の関係から退院後は約1か月時点での効用値しか解析対象とできなかったが、次年度は、退院後約6か月時点での効用値をも算定し比較する予定である。退院後約1か月時点での効用値がどのように変化するのか、興味深い。

E. 結論

2020年1月より、聖路加国際病院外科系診療科に予定入院した患者を対象に、入院前、退院後の約1か月、約6か月での日本語版EQ-5D-5Lの取得を開始した。

2020年1月～3月の間に日本語版EQ-5D-5Lが発行された件数は799件であり、そのうち入院前と入院後約1か月時点でのデータが得られたのは145件であった。その145件について、入院前後の効用値を比較すると、退院後約1か月時点での効用値は入院前に比べて低くなる傾向が認められた。

次年度は、退院後約6か月時点での効用値を測定し、退院後約1か月時点での傾向が継続するかを検討する予定である。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表 該当なし
2. 学会発表 該当なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得 該当なし
2. 実用新案登録 該当なし
3. その他 該当なし